

【基調講演】 「都市の活性化と写真」

講師：有野 永霧 氏（大阪芸術大学 写真学科 教授）

平成21年8月21日、シリーズ「地域と産業」講演会を、『産業都市尼崎の活力・にぎわい』と題して開催しました。この記録は、講演会のうち、大阪芸術大学教授の有野永霧氏が行った基調講演をとりまとめたものです。

有野永霧でございます。私は、写真の批評、あるいは感想を述べるのは楽しくやる方でございますが、こういう基調講演となると不馴れでございますので、期待に十分応えられるかどうかわかりませんが、どうかよろしく願いいたします。

私は、尼崎生まれで塚口小学校出身でございます。そして、この地でずっと生活をしてまいりまして、今、68歳。そしてあと何年かのちにはあの世へ旅立ちますが、それも尼崎の空気を吸いながら、行くのではないかと考えております。どっちにしても生粋の尼崎っ子だと自信を持っております。

さて、その私の出身の尼崎で、写真が地域文化活動に活用されて、産業の活性化に寄与できるという機会を得ました。これは、写真をやっている人間にとって非常にうれしいことでございます。また、今は亡くなりました母が、生前「おまえは塚口で育って、いろいろ尼崎に世話になっているのだから、大きくなって、もし何か役に立つことがあれば、いい働きをせよ」というような遺言めいたことを、言ったのを憶えております。そういう意味で、この企画に参画できますことは、私にとっても光栄でうれしく思っております。

1 写真の持つ力

本日の演題は、写真を活用して、都市の活性化をうながそうという企画でございます。写真が都市の活性化にどのように生かされるのかを考える時には、まず写真の力とはどういうものか、その力を見極めて、その力を活用するということが必要になると思います。

そこで、いくつか写真の力について、具体的にお話してみたいと思います。

まずは、記録する力、「**記録力**」があると思います。この会場の隣りで「昔と今の尼崎写真展」を行っています。現在の写真と数十年前の写真が並列されております。その現在のものだけを見ても、それほど感動はありません。数十年前の写真が並ぶ、そういう記録されたものがあることによって、現状把握の意味合いが、大きく変わってきます。そして、もう一つ、人間の記録は、人間が生きてきた証であり、記録は心の拠り所にもなると思います。

例えば台風の洪水で家が流された、その人にあるテレビ局が取材をしているニュースを見ました。「あなたは家を流されましたけれども、何を一番、残念に思いますか」という問いかけに、その人は奥さんでしたが「私の家族のアルバムが流されたことが、なによりも一番残念です」、このように言われました。記録というものが、人間にどれだけの勇気を与え、生きる力と支えを与えているのかということを感じます。

2番目には、「**伝達力**」というものを考えてみたいと思います。

文章は読むのには努力が要ります。時には知性も要ります。それに対して写真は、パッと見ただけで、それぞれの人が感じることができます。非常にわかり易いし、理解し易い。そして、即効性の豊

かなメディアでもあります。

さらにこの伝達力という点では、どこかに展示をするために運ぶ場合、もとあった所から、ちょっと車で運べば、手軽に会場まで持って行ける。セットするのも非常に簡単で、そしてある意味では大芸術とは違って非常に安価にも活用することもできるということが言えると思います。

この安価さについては、写真を作る人間にとっては、「何が安いねん。これ、金かかってんで」という話になるかと思いますが、その点は今、少し置いておきます。

3番目には、今回も活用しようとしている一つの目的にもなっている、「**広報、宣伝力**」の強さというものがあるかと思っています。これは、土曜日や日曜日の朝刊に、チラシが入って来ますね。すごいお金がかかっていると思います。それにはそれだけの効果があるからです。そして、そのチラシの中にはたくさんの写真が使われています。そういったものを見ると、写真の広報力、伝達力というものが、非常に効果があるということがおわかりいただけるのではないかと思います。

それと、写真には「**発見力**」というものがあると思います。

なに気なく歩いていると、風景や光景は、目に飛び込んでまいりません。漠然と通り過ぎて行くと、それほど意識は働きません。ところがカメラ1台を持つと、目が変わります。感覚が変わります。反応が変わります。「何かないか」、今まであまり気にしていないものに対して、写真になるものはないか、すなわち自分の意識に飛び込んで来る新しいものはないかというように、いわゆる発見をしようというところの体験がされるようになります。

撮る人は、そのように発見しようという気持ちで撮って、そして「やったー、これ見せたいな」という喜びを感じる、と同時にそれを見た人は、普段は見過ごしていたものが写真という形になることによって、「ええ、こんなものがあるのか、ああこういう見方もあるねんな」ということで、写真家の発見の喜びと同じものを追体験すること、認識することができる。このような「**発見力・体験力**」というものが撮る者にも、見る人間にとっても起こり得るのです。

2 写真の持つ文化的な意味合い

写真は、日常簡単に何処でも見られるものですので、意識があまりないかも知れませんが、非常に「**文化力**」といえる力があると思います。私も海外へよく行きます。あるいは日本の県庁所在地や日本中の国道、海岸線をずーっと回って来た人間です。ですからその都市、そのまち、それぞれの地域の微妙な違いを感じてきました。昨日まで実は中国の「麗江」に行っておりまして、世界遺産の都市を見てまいりました。麗江が持っている、いわゆる一つ一つの事象、なかには字が書いてある、そして絵がある、写真がある。

そのまちを歩いて飛び込んでくるポスターやチラシのデザイン、写真などが、非常にハイレベルなものになると「おっ、このまちは、すごい文化的な力があるで」という認識になります。しかし、それがつまらないものであれば、「つまらんまちやな」と感じます。その意味で、単なる1枚の写真、ポスターが貼ってあったとしても、それが、その都市のデザイン力あるいは文化力の証しであるというふうに、他所から来た人には感じるものでございます。そういう意味で、写真は、実は非常に大きな文化力を持ったメディアであると思います。

最初に、写真というのは記録力がある、と言いました。その記録力が、「**歴史・文化の継承の力**」にまで広がっていくと思います。先人が引き継いで来た伝統行事、そういったものの写真があると、それを10年後、20年後に見直せます。あるいは公民館に地域の記録をずっと貼ったり、あるいは最近の日本の家屋ではあまりありませんが、自分の先祖の写真が貼ってあることもありますように、写真には時間を継承する力があると思います。

ただその継承力をあまり認識しないと、一個一個の記録が点になってしまって、十分な線にまで広がって行くというか継承して行くということがないので、意識的に写真には継承力があるという認識がなされてもいいのではないかと思います。私が、このコンテストの審査を引き受けました意味合い

はまさに、この点にあるのだと思っております。

どうということかと申しますと、写真には、自信と誇りと精神力を育む力がある。市民の人たちが街のいろいろな自然、事象、歴史、祭りといったものを認識できますと、そういった物事があることでこの街に住んでいるという自信にもつながり、そして「こんなもんが尼崎にあるんだ」という誇りを感じるということもあります。誇りを感じれば「よし、この街で生きてみよう、頑張ってみよう、生活してみよう」という精神力も鍛えられるのではないかと。写真1枚にそういった力があります。

私が審査させていただいています「あまがさきの身近な自然」コンクールの作品を使って毎年カレンダーが作られます。20数年やっているのですが、毎年カレンダーができた時には、市役所の環境政策課には千人以上の方が並ぶと聞いております。市民の方々に非常に喜んでいただいております。あれば幼稚園、小学校、中学校、公民館、その他の市に関係がある所などいろいろな場所にも貼られております。

1年間見ていただくカレンダーです。こんな動物や鳥が尼崎にいるのか、こんな自然があるのかと感動していただいております。20数年間、あのカレンダーが各家庭や、各施設に貼られ、見られることによって、多くの方が、尼崎に自信、あるいは誇りを持っていただける。そして市民が「わあー、こんなすばらしい尼崎で頑張ってみよう」という気持ちになっていただき、生きる力を沸き起こしていただけたらと思っております。

写真の持つ意味をいくつか挙げましたが、私が今回のコンテストで、本当に力を注ぎたいと思うのは、市民の方々に自信や誇りをもっていただきたいと考えております。

3 「産業のまち尼崎」写真コンテストのねらいと対象

今回の企画の狙いを簡単にお話しましょう。今回の企画は、今申しあげました写真力を活用して、尼崎の活力を生み、生きがいを感じる街づくり、産業の活性化を図ろうとするものです。ですから、この企画が求めるものは、地域資源を写真で発掘すること。すなわち尼崎を知ること。そして尼崎を知って理解することで、尼崎愛を産もうとする。目的の最終は尼崎愛だと思っております。この企画は、その愛の力を都市の活性化に活かそうとするものであると解釈して進めたいと思っております。では、本題の写真についてお話しましょう。

「写真にしようとする時に、尼崎には具体的にどんなものがあるのか」という問題でございます。

今日は、たくさんの方にお集まりいただき、ありがたいと思うのですが、いろいろな方がおいでのようです。恐れ入りますが、ちょっと調べさせていただきたいと思っております。先程申しあげました「あまがさきの身近な自然」や、農政課の「尼崎農業祭写真コンテスト」とか、この「工都尼崎の情景写真コンテスト」に参画、応募していただいた方、あるいは応募はしていないけれども、写真を撮っている、あるいは「今回は出品してみたい」と思っておられる方、写真に興味を持っておられる方、恐れ入りますがお手を挙げていただけますか。「おー、8割、9割ですね、はい、わかりました」。たくさんの方が尼崎の写真と関係しておられるということがわかりましたので、それでは尼崎という地域が持つ、財産、資源、資産といったものをちょっと考えてみたいと思っております。

具体的なものは、後ほどパネル・ディスカッションで話ができるかと思いますが、私は**尼崎の資源**を5つほど挙げてみたいと思っております。

まずは**地域資源**ですが、これを地理的資源という立場で考えてみたいと思っております。

先ほどお話ししました「麗江」、この街は非常にすばらしいまちです。まちづくりが本当にすばらしい。麗江が持っている、あるいはそれにかかわった人の叡知を結集した街であると感じました。

家並みはすばらしい、街並みは水を非常に美しくレイアウトして、夕方から夜11時くらいまで、観光客を中心に、人の途絶えることがありません。京都でもあそこまで考えられていないと思っております。それは自分達が持っている地域的・地理的資源を見事に活用したからだと思っております。

私は尼崎が持っている資源の第一は案外、疎外されている部分ですけれども、水だと思っております。“水

の都、尼崎”というスローガンをつくりあげてもいいくらい、水に恵まれていると思います。

西は武庫川、北東は猪名川、藻川、そして南は海。四方を水に囲まれ、昔から江戸幕府直轄の地でありましたように要衝の地でもありました。

現在においても、その地理的要素は変わっていないと思います。さらに、もうひとつ大きな地理的資源は交通網でしょう。東西に1級国道、2号線が走っています。南北に走る幹線道路も多くあります。さらに、3本も鉄道が走っています。北から阪急、JR、そして阪神があります。こんな街は、全国を探しても、そうあるものではありません。

それから写真にするのは難しいことかも知れませんが、忘れてはならないのが**人的資源**というのがあると思います。尼崎には非常に有名な、あるいは隠れた文化人がおられます。芸術家やタレントも多数います。財界人も、スポーツ選手も、学者の方々もたくさん住んでおられます。

このように、文化人と言われる、そういう資源は非常に豊富な街だと思います。特に落語家の人間国宝である桂米朝さん、これはみなさんもよくご存知だと思います。こういう人間国宝が居られます。さらに画家の白髪一雄さん、残念ながら尼崎がどれだけあの方のすばらしい作品を本当に評価したか、僕は疑問に思っておりますが。あの白髪一雄という方は、尼崎の、阪神間の、日本の、世界の作家です。残念ながら亡くなられました。この建物の向かいにある総合文化センターで9月6日まで「白髪一雄展」をやっていますので、どうか、この後、帰りに立ち寄っていただいて、尼崎が生んだまさに尼崎の匂いのする作品をご鑑賞いただきたいと思います。作品を見て「あっ、これは尼崎の匂いがするなあー」というものを感じとっていただくのも鑑賞法のひとつでもあると思います。

でも、絶対的な人間資源は何かと言いますと、尼崎に住んでいる市民だと思います。この市民は、決して他に劣る市民ではないと僕は確信しています。

また、地理的要素も強く、神戸、大阪、その他との交通の要衝にありますので、市外の方の力を得ることができる地域でもあります。すなわち、市内の人々だけでなく、市外の人々の力も尼崎の人的資源の中にあると思います。

次に**文化、歴史資源**があるかだと思います。寺町や各地域の寺と神社等に多くの資源と、その関係の伝統文化が残されています。また、市民祭り、農業祭、そういう祭りもありますし、各地の盆踊り、だんじり祭り等もあります。調べていただきますと、尼崎には66社の神社があって、いろいろの催しが各社でなされています。

一つだけ残念なのは、尼崎に美術館がないことです。以前に調べました。「50万都市で美術館がないのはどこや」と調べたら、その時は尼崎は50万都市でしたが、3つありました。その中に堺市が入っておりました。もちろん尼崎市も入っておりました。先日、堺市へ行きますと、すばらしい文化館ができておりました。尼崎も「総合文化センターがあるやん」と言いますが、残念ながらあれは我々の目から見ると美術館とは言えません。これから20年か30年かけても、美術館がある街にしよう計画を、今から立てていただければ有難いと思っています。

さて、もう一つは文化的な面なのですが、ないようでもやはり有るとというのが南北の文化の違い。伊丹市に近い阪急沿線、市庁舎があるJR沿線、それから阪神沿線。そこには異なる文化の層というのがあります。大体これは、どこの街でも東西の文化の違い、南北の違いというのは起こるものです。いや、それを認識することによって写真にしたり、あるいはそれを使った、いわゆる産業活動がなされてもいいのではないかと思います。

それからもう一つ挙げてみましょう。**観光資源**。「おい、そんなもの尼崎にあるか」と思われるかも知れませんが、有ります。市民の方、そして市外の方が集まって来る空間というのがあります。例えば寺町なんかもそうでしょう。それから交通公園（西武庫公園）があります。上坂部西公園などの植物公園があります。スポーツセンター（記念公園総合体育館）があります。そしてまたスポーツや散策のできる川（武庫川など）があります。魚釣り公園もあり、釣りの好きな人は、市外からもやって来ます。そういった海岸線があります。また娯楽施設、車で行ける大きな商店街、例えば、つかしんみみたいな商業施設があります。そういう空間を求めて、市内の人も市外の方も来られる

と思います。そういう人が集まってくる資源もあると思います。

そして忘れてはならない、しっかりと我々が認識しておかなくてはならないのは、近代的な工場をはじめとする**産業資源**です。産業といいますとすぐ新しいパナソニックも期待していますが、小さな町工場にも産業の資源は存在します。

みなさんにとって、これらの資源を通して、その中に新しい発見をしていただけると、今回の写真コンテストは、きっと大きな歴史的な遺産になっていくと思います。

4 「工都尼崎の情景」での審査の視点

ここで、審査を引き受けたわたしが、どのようなビジョンを持って臨んでいるのかということをお話します。その私の姿勢を、極端に言えば理念を、前回の「工都尼崎の情景」という写真コンテストの作品を、スライドで上映しながら説明させていただきます。

この工都尼崎の写真コンテストについて、5～6年前に相談に来られました。「こんな写真コンテストをやりたいのですが、手伝っていただけませんか」と言われ、「いやー、ちょっとまいったなあー」と思いました。なぜかといえば、尼崎の海岸線や街をしょっちゅう歩いていますけど、「工都なあー、建物はああるけど、コンクリートいっぱいやしね」。これらは無機物なんです。印象が、生きていない。中では活動しているんだけど、外部から写真を撮っても建物があったり、煙突があったり、機械が写されても「何が面白いねん」、こうなれへんかという心配がありました。

つまり、無機物は写真になりにくいのです。写真を撮られる方、何を狙えばいいかわからない時は、生きているものを撮ればいいと思います。花をはじめ、動物、生きているものには生命があって、それと人間とは自然に交流が生まれます。ところがコンクリートがここにバーンとあって、コンクリートと対話せよ、といっても対話のしようがない。無機物の工場群にいかにかに生氣を吹き込むか、人間が活動している地域としての工都尼崎をどう表現するかが勝負でした。

すなわち、生氣のない工場ではなくて、人間の生きている工都尼崎を表現したいなあーと思いましたが、でも、どんな写真が出て来るかわからない。無機物のものばかり集まって来るかもわからない。「どうしよう、その時はどうするか」という心配がありました。

「工都を撮れ」といえば、どうしてもカメラをぶら下げて歩きます。そして工場の外から撮る、あるいは通りを撮る。何か周りを撮る。客観的な物を撮る、という外部の目になってしまう。これまた、あまり面白くない。やはり主観的な眼差しで、そして内部をも見られる、そういう視点が欲しいなと思った。でも、そんなものが応募されて来るだろうか。もし、そんなものが応募されて来ないと、この企画は、生氣のない無味乾燥な結果に陥ると思ったのです。そしてもう一つは、この企画の本当の意味は、誇り、自信、愛を育むということでありますので、明日への希望を抱かせるような工都尼崎のコンテストになるかということが私の大きなテーマとなりました。

その結果を今から 10 分程上映してみましよう。私の心配は、まったくの杞憂でした。送られて来た写真は、まあ見て下さい。私は自信を持って、写真の専門の方に見てもらっても恥ずかしくない作品が集まったと思っております。

工都尼崎の写真コンテストは、2004年から2008年の5年間行われました。はじめは1年で止めるのではないかと考えていたら、2年目も続ける、3年目もする「おう、3年やれば、これ一応やったことになるな」と「しかしまあ本当にやる気なら、5年頑張れ」という声もかけました。

一つの文化が生まれるには、5年では足りません。では10年か。いやまあ25年はかかるでしょうね。我々といってもみなさん若い人ばかりですが、僕の生きている間には、今から始めても本当の文化は育たないかもしれないと思いますけれども、25年これが続けば、文化になると思います。継続していただきたいものです。

工都尼崎の情景を5年間続け、さらに発展、継承した形で6年目にこの企画があると考えれば、これが尼崎の大きな財産となって、尼崎文化の一翼を担うかもわからないと思っています。

それでは見て下さい。(スライド上映)

第1回目(平成16年度)の最優秀賞に山田さんの「尼崎のシンフォニー」。1回目の最優秀賞。私の考えをお聞き下さい。

クレーンで持ち上げられたロープだと思います。それを横から撮っているから、穴が見えています。5円玉に見えないでしょうか。5円、ご縁がある。中国に行った時に、「金くれ」とボーイが言うので、500円玉があったので500円玉あげたところ、「いらん」という。ほんなら小銭入れをバサッと開けると、「これや」と5円玉と50円玉を欲しいという。穴の空いたお金が珍しく、非常に中国では珍重されています。ちょっと雑談でしたごめんなさい。

産業、工業は、やはりマネー、お金との関係が深いものです。一見したところ、工都とは関係がないように思われるかもしれませんが、この写真が応募されてきたことによってコンテストの目的が、



はっきりと多くの人に伝えられる可能性があると思いました。

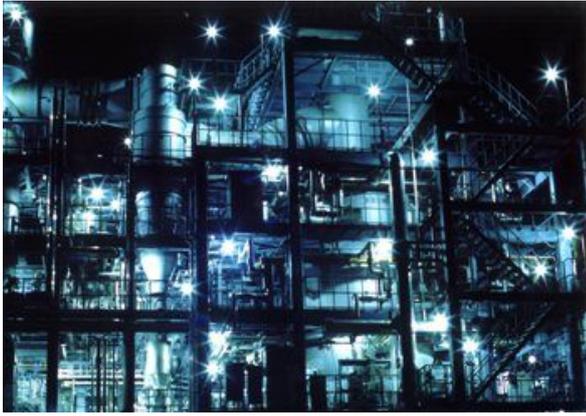
単純な、いわゆるあたり前の普通の工都尼崎を求めておりません。少なくとも、これだけの象徴力のあるそういう目線でこのコンテストに立ち向かって下さいというメッセージを、この山田さんの作品で、私は示すことができました。この後、このコンクールの成功の原動力になった写真です。でもそれも、応募されなかったら選ぶことはできませんね。この企画に非常に大事な1枚でございました。



次は、森田さんの作品、「海岸線」。海岸線には、尼崎の雌雄を決するとも言われている埋立地があります。ものすごくお金を使って埋め立てたんでしょうね。昨日も飛行機で関空へ帰る時、ちょうどこの上を通りました。たくさん埋め立てをされていますね。尼崎にとって、ここの空域というのは非常に意味のあるものです。その海岸線の高速道路を暮情豊に、美しく表現しています。近代的な美しいデザインが、尼崎の明日に夢を抱かせる写真だと思います。スポットライト的に反映する夕日が印象的です。



今はどれだけ使われているのかわかりませんが、工場の中に走っている貨物のラインですね。そこに一人の工員が「よく働いた、さあ帰ろう」ということで、自転車に乗って帰って行きます。「今日も一日お疲れさま」というタイトルで、荘司さんの作品です。きっとこの方は、自分もこういうふうな所で働かれて、そして、こういう気持ち、夕方帰る時に「さあ、帰ろう、でも一日働いたなあー、意義があったなあー、さあこれから愛する家族のもとに帰ろう」なんていう想いを抱いたことのある方の作品だと思います。



「明日への残照」。谷田さんの作品ですが、メカニカルな無機物であっても、その直線と色の配合をうまく使うことによって、生き物のように、怪獣のように表現できています。ターミネーターという映画がありましたよね。映像によっては、無機物であっても人間が感じることができることを証明しています。青の色がなんとも印象的で、しっかりと情緒化できています。写真によって生まれる夜の工場美が、明日への活力を引き出しています。非常に構成力のあるすばらしいフレーミングだと思います。



鳴瀬さんの「快晴の左門渡川」です。尼崎の代表的で公式的な風景です。ここに行けば、1枚撮ってみたいと思う、そういう写真です。空間の使い方や、色のバランスがすばらしい。白い船、赤い煙突、ブルーの空と運河、そして翳った工場などが非常にバランスよく捉えられています。特に船と煙突が画面を引き締めています。風のない日に撮られているので、現実過ぎて、シュールレアリスティックな印象が生まれ、非常に幻想感のある風景になっていると思います。絵葉書にしたくなるような写真です。



第2回目（平成17年度）の最優秀賞です。第1回目は、5円玉のような抽象的な作品でした。さあー2回目はどうなるかと思った時に、この作品がたくさん作品群の中から現れて来ました。「待ってました」と飛びつきました。工都尼崎、人間の営み、そして大工場もありますが、中小企業もあります。その中での休憩時間か打ち合わせ時間。カレンダーも効いていますし、談笑の表情が特にすばらしい。先ほどまでの作品は、外部で撮っていましたが、内部に入って撮る、なかなか写真を撮る時に中に入っていくのは難しいものです。鹿島さんの作品です。



「陽光」、これはまた幻想的な風景ですね。単純な工場がある、広場がある、鉄道があるという説明写真で終わらずに幻想感、そういったものが写っており「尼崎も昔はばい煙の街でだったが、今ではこういう空気感がかんじられる、魅力的な一面を醸し出す街になったのだなァ」という感慨が感じられます。夢の町、現実的でないおとぎの国を感じさせる雰囲気にあふれています。森田さんの作品です。



荳司さんの「現役健在なり」。どうしても外観を撮るといことになります。工場の中には、なんとも摩訶不思議な何か生き物が潜んでいるような、インベーダーが居るんじゃないかと感じる気配があります。何か機械そのものが単なる無機質な機械ではなくて、生き生きとした活動中の存在感があります。そういったものを感知しながら撮られた作品ですね。ここには働く人間、働いてきた人間のいわゆるイメージがぐっと凝縮されている、そういう映像だと思います。



そして3回目（平成18年度）。今度は働く人がテーマになっています。工場は生産の場でもありますが、人間の働く場所でもあります。縦位置の構図で、いわゆるそうですね、水墨画なんかを思い出していただけたらいいかと思いますが、この構図によって非常に気品が生まれ、働くということの人間的な尊さ、そういったものが感じられます。そして仕事も誠実に、しっかりと間違いなく正確にやろうという勤労意欲や労働者の精神力まで感じさせる写真だと思います。バックが黒く、人物が浮き出てくるライティングが素晴らしいので、そういった精神性が、特に感じられるのでしょうか。この写真コンクールの真の目的である労働を感じさせ、工都が人間の生活の場であることを感じさせるために、なくてはならない作品でありました。



青山さんの作品ですが、見せる上でのポイントは、白い工場と赤い煙突と2本の蒸気です。煙突と蒸気との接点、くっつき方が微妙な表現になっており、視線を誘導しています。そこから四方へ展開させる構成が見事です。タイトルも意味性が高く、「光明」となっています。産業尼崎のよき未来を感じさせる明るさがあります。このような傍観的な写真は、インパクトにかけものですが、この作品は安定感のあるすがすがしい作品となっています。



荒木さんの「世界への架け橋」という作品で、平成19年度の最優秀賞です。美しいですね、夜の工都が美しく表現されていますね。このような時間の光を写真で表現するのは、非常に高度な技術が必要です。僕は、夜の撮影に強いデジタルで撮ったのかなと思ってお聞きすると、デジタルではなくて銀塩で撮られたとのこと。色がすばらしいですし、工都尼崎のポスターを作るとすると、この写真も候補の一つとなるでしょう。アマチュアの域を超えた作品です。



働く人。「企業の支え」というタイトルもいいですね。尼崎の産業を支える人、それは働く人です。円形の構図の中に作業中の人を配置した構図が堂々としています。作者は徳本さんですが、この方も尼崎の写真コンテストでは、本当によくご協力いただいています。関係者一同いつも感謝しています。例えば尼崎の写真応援団を作ったとしたら、入っていただきたい第一人者の一人であるような方です。このような方に支援されて、企画が成り立っていることを忘れてはならないと思っています。



「企業にも春来たる」は荘司さんの作品です。この方も今日は何度も登場していただいていますね。こういうふうは無味乾燥な所にも、春夏秋冬の四季がある。一見無味乾燥な工都にも、間違いなく春夏秋冬が繰り返され、四季がめぐってきます。瀬戸内海気候の尼崎、こういう視点から、植物に対しての目線も生かされていますね。木々を見ますと、冬から春にかわっていく時期の季節の狭間が写っており、味わい深い作品です。



そして最後の5回目、平成20年度の最優秀賞、鳴瀬さんの「お出かけ日和」です。

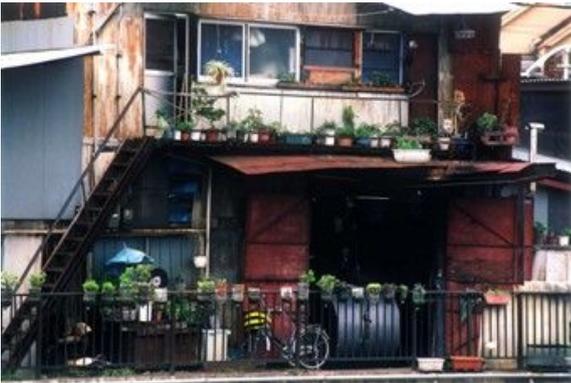
この作品と、次の写真と、どっちをトップにするか迷いました。最終的に、これをトップにしました。その理由は、普通はこんな工場街では、大人が登場してくるものですが、子どもが登場しています。明日の尼崎を担う子ども、その子どもに夢を託して工都尼崎の明日を夢見ようと呼びかけているのです。こういう思いを大切にしまして、この作品をトップに置きました。でも、次の写真もすばらしいです。



林さんの「春の訪れ」という作品です。いい構図ですよね。前景に春を感じさせる花を置いて、うまく季節感を出しておられます。そして日曜日も、何かの労働に従事している人でしょう。健康を大事にしている人がジョギングをしている。街の中をジョギングするのは大変ですよね。その点、この工場のあるエリアは、最高のジョギング・コースです。特に空気もすがすがしそうで、尼崎ジョギング・コースとして推薦しても良い場所ともいえますね。こんな工都風景もあるんですね。



喜多さんの作品「尼の祭り」。工都とどんな関係があんねんと思われるかもわかりません。でも、このだんじり祭りは、昔から工場で働いておられた方々の支えによって、ずっと続いて来た祭りでございます。そういった働く人たちが、祭りを楽しんで、そしてまた、明日のエネルギーを作り上げるという機会がこの祭りなのです。ということで私は、歴史の流れの点からでも、この工都の写真に入れたらよいと作品だと思って選ばせていただきました。



これは森田さんの作品で、この方も尼崎の写真コンクールでは常にご協力いただいています。ありがとうございます。「町工場」というタイトルです。モダンな建物も美しさがありますが、市民が、住宅兼工場の建物の前に、何年も何年もかけて盆栽を育てている。そういう何年もかかって作り上げた、そういう町工場の表に表情を、非常に愛情を込めた眼差しでとらえられていますね。工場愛、尼崎愛のまなざしを持った写真家がおられることは非常に有りがたいなと思いました。



そして最後、藤原さんの作品「休日の喜び」です。バックには工場があり、河口がある。まさに尼崎のウォーターフロントですね。そして「さあー、今日は日曜日や、釣りに行こう」ということで、尼の海岸線の突堤にやってきて、見事な釣果があった。一週間の疲れを癒して、そして明日の英気を養おうとする労働者の夢が写っているのではないのでしょうか。こういう健康的な未来性のある写真で一応、これまでの5回の作品の短評を締めくくらせていただきます。

このように工都でも、写真によってさまざまな表現がなされていることにお気づきいただけただけではないでしょうか。そして、尼崎の写真愛好家の実力のほどを見ていただけたと思います。

5 「産業のまち尼崎」写真コンテストに向けて

では今回の「産業のまち尼崎」の写真コンテストについてお話ししましょう。まず、産業とは何かということを確認しておきましょう。「産業」を辞書で調べてみました。「産業」とは

1. 生活をしていくための仕事、生業。
2. 生産を営む仕事、自然物に人力を加えてその利用価値を創造し、またこれを移転する経済的行為。
3. 農業、工業、商業及び貿易など。

これを見たら産業というのは暮らしのことで、人間の生活全般を表しますよね。そういう意味では、今度のコンテストは、工場とか、あるいは自然とか、あるいは農業・工業という狭いものではなくて、

なんでもありというか人間に関係することすべてを産業という視線で捉えることができるのではないかと思います。

私は、産業の活性化は、まず愛によって支えられるものと信じております。ですから郷土愛であるとか、仕事愛、家族愛、人間愛、隣人愛、そして今回は写真が使われますから、写真愛、こういうものを使って写真のコンテストが進められたらいいなと思います。

今日のこのシンポジウムに集まっていたみなさんも、そういった尼崎を愛する心、そして写真を愛する心を持った方々がお集まりになられたのだと思っております。非常に力強い気持ちになっております。どうか愛の力、尼崎愛の力で尼崎の産業、ひいては尼崎の生活、さらに未来を担えるような、そういうものに仕上げ、この企画を成功させていただきたいと思っております。

最後に応募いただくみなさん。撮っていただく時に、尼崎愛、「尼崎って面白いな」という気持ちで、いろんなものに好奇心を働かせていただきたい。また、市外の方々も尼崎の力になっていただきたい。どうか尼崎のためにお力添えをいただければと思います。

まず、応募作品に求めるものとしては、できるだけ多様に反応していただきたい。みんなが「これやったら入るやろな」とか「あんなやったらトップに入るやろな」という既成概念にとらわれて、同じような発想のものを送ってこられることがあります。みんなの逆をいかんとアカンのです。みんなが前を向いていたら後を撮る、そういうふうな精神が発見の大事な姿勢だと思います。

それから、もう一つ。さきほど打合せの場で、担当者と市長のおられる所でお話をしておりましたけれども、私は写真を集めて、これを尼崎の財産にして、そして5年、10年、30年後にまで生かされるシステムを作ってもらうことを提言しておきました。ですから、みなさんが、送っていただく写真のコンテストの作品は、尼崎の記録の財産やと認識しております。応募の結果、「入った、市長賞を取ったわ」「ああ賞金をもろたわ」というだけではなくて、自分の作品が後々まで尼崎の文化財産になるんだという、そういった気持ちでやっていただければ有り難いと思います。

一応、応募期間は8月1日から平成22年、来年の1月31日です。これが問題です。6か月もあるようですが、実は時間がないのです。今からやっても、夏の写真、秋の写真、冬のちょっとした写真、それでは肝心の春がないの、おわかりいただけますか？今までのストックも紐解いてください

尼崎の身近な自然でも同じです。締切りが、どうしても夏になってしまう。農業祭のも夏になるから田植えの写真ばかりになってしまう。どうかスパンを1年という期間、このコンテストがいつまで続くかわからんけれども、年間を通じての目線で捉えていただきたいと願っています。みんなが見つけられないようなもの、気がつかないようなものが欲しいという、そういう力学も知っていただきたいものです。もちろん良い作品であるという条件が付きませんが。

頑張ってくださいと思います。期待しています。みんなで尼崎の写真文化を育てましょう。

ご静聴本当に有り難うございました。（拍手）

有野永霧（ありの えいむ）

尼崎市生まれ。大阪学芸大学（現大阪教育大学）卒業。

1985年尼崎市民芸術奨励賞、2002年尼崎市民芸術賞受賞。

1983年タイムライフ写真年鑑新人賞、1994年第19回伊奈信男賞受賞。国内外で多数の写真展を開催し、写真集に「虚実空間・都市」、「都市からのメッセージ」、「都市との対話」、「虚実空間・空蟬の都市」、「虚実空間・空蟬の風景」などがある。

「工都尼崎の情景」写真コンテスト、「あまがさきの身近な自然写真展」、「尼崎市農業祭写真コンテスト」審査員。2009年からの「産業のまち尼崎」写真コンテスト審査員。